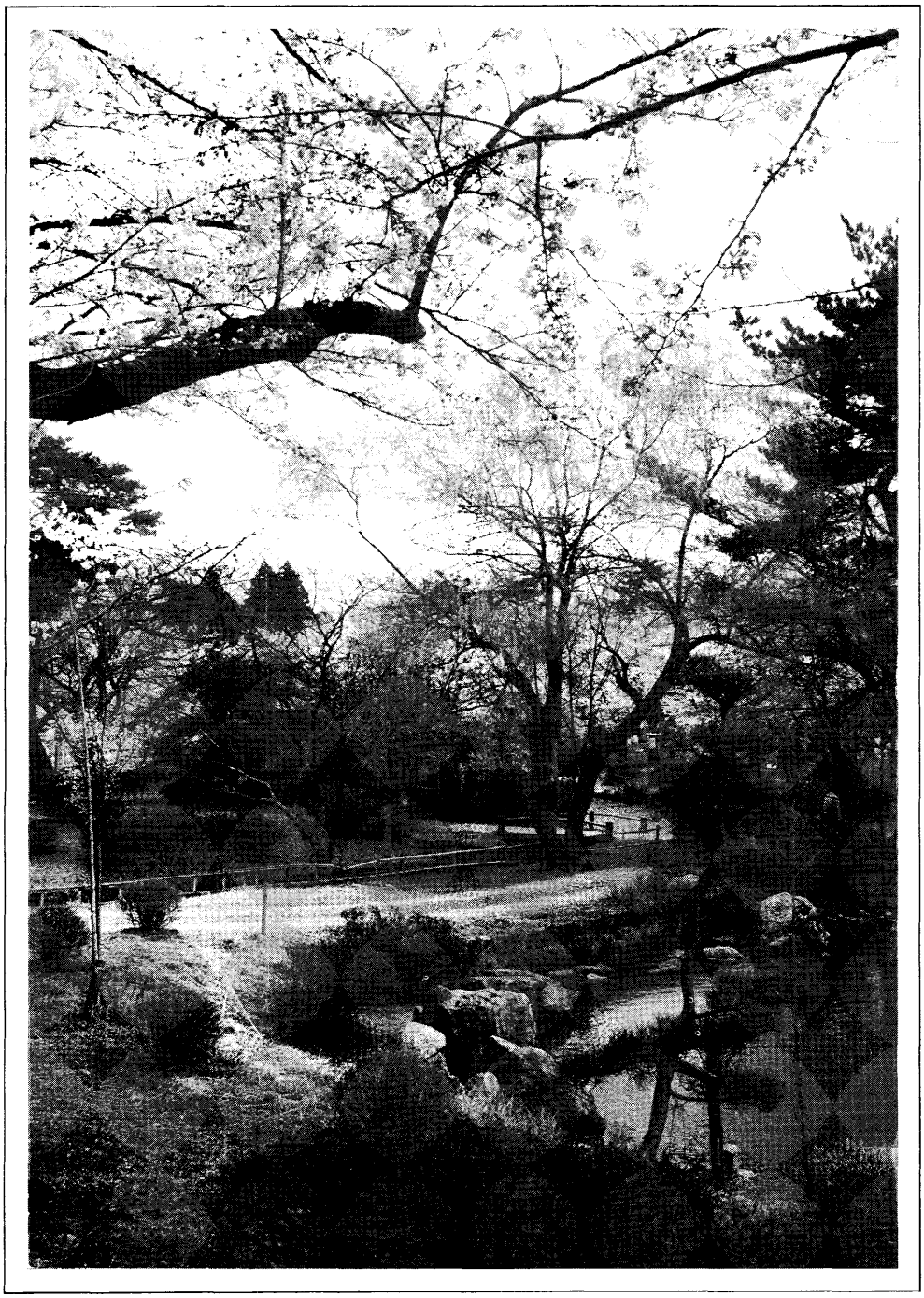
臥龍が丘は緑なり

松高同窓会東京支部会報

平成５年度(第36回)支部大会号　7.3



新潟県立村松高等学校同窓会東京支部　No. 15

第36回東京支部大会プログラム

平成５年７月３日(土)　午後３時

於・池之端文化センター

場内司令……◎伊藤　勇五（中33）

案　内……◎沢出　赳允（高６）　小林　早月（女25）　深見　洋子（高７）

受　付……◎岡本　和子（女25）

A「旧中，旧女」……	○佐藤　玲子（女25）	中村　雅明（中33）	寺山　征子（高10）
B「高校男子」……	○青木　　猛（高２）	木村　孝子（高８）	笠原　静夫（高18）
C「高校女子」……	○山西愈佐子（高８）	片柳　ムツ（高８）	眞水　道子（高10）
＊「景品受付」……	○渡辺　八郎（高３）	大江　佳一（高４）	佐久間英輔（高６）
＊会報記念品配布……	○八木又一郎（高７）	今井　　正（高２）	田淵みやの（高12）
		山下由紀子（高10）	渡辺　厚子（高12）
会　場……	◎鈴木多喜男（高４）	関　　孝世（高３）	広田　達衛（高５）
	簗取　錦二（高７）	塚田　　勝（高８）	鶴巻　　浩（高10）
	田代　信雄（高11）		

開会宣言 …… 伊藤　勇五（中33）

第一部

司会進行…… 斎藤　和男（中33）　鈴木　節子（女25）

経過及び会計報告…… 事務局長…… 中村　倉吉（中22）

会計監査報告…… 監事…… 芳賀　健一（中33）

支部長挨拶…… 佐伯　益一（中27）

来賓挨拶…… 同窓会長…… 茂野　敏郎（中17）

学校長…… 徳増　時男

職員紹介…… 酒井　重雄（高11）

文部省唱歌「ふるさと」……全員合唱…… 女子役員リード

第二部

懇親会・乾杯……（古写真該者の中から）

歓談・会食

アトラクション…… 演歌歌手・杉　　幸子…… 小沢　幸子（高21）

ジャンケンゲーム…… 「佐伯賞」石黒　四郎（高９）　小島　典子（高10）

大橋　貞夫（高10）

抽選会…… 篠川　恒夫（高２）　佐久間英輔（高６）

中島　和子（高12）　近藤　燦子（高12）

校歌・応援歌…… 全員

手締め …… 支部長

万歳三唱 …… 学校長

閉会挨拶 …… 堀　　哲二（中24）

写真・インタビュー…… 広報部

☆……☆

（表紙写真について）

村松公園の桜……カラーで現(あらわ)せないのが残念……

1993年４月　村松町在住　伊藤　　正氏（旧中32回卒）撮影

ご挨拶に代えて

常々、思うこと

東京支部長　佐　伯　益　一

“皇太子のおかみさんが決って良かったネ”と云ったら，うちのかみさんからどやされた。皇室に対してかみさんなんて，そんな失礼なことは言うなというわけである。あんたは只のかみさんだが，さき様には〝お〟が付いているよと笑い話でおわったが，この会報が皆さんの手に渡る頃には，結婚式も被露の宴も終っている事であろうが，最近とかく不肖事や不愉快な事件の多い世の中，一服の清涼剤として私達の心を和やかにしてくれる。まして将来，我々国民の象徴となられる立場の方であるから，こゝは冗談は抜きにして謹んでお慶びお申しあげずばなるまい。然し婚約が発表された前後のマスコミのあの過熱的，狂乱的報道ぶりには只々驚く外はない。小和田家を始め御本人の雅子さんもさぞ迷惑されたことと思う。そして，日が経てば忘れたように静かになる。そして又騒ぎが繰り返えされる。そういえば矢鴨の件がそうだ。金丸氏にまつわる事件も然り。佐川事件，リクルートの件は一体どうなったのであろう。今はＰＫＯで騒ぐ。

フト思い出した母校創立80周年記念事業として，当事大さわぎして金を集め，作った雨天練習場は，其の後どれだけの効果をあげているのであろうか，効率的に使用されているのかまさか雨の日だけ使用してあとの日は未使用というわけでもなかろうが，一度訪ねてみたいと思っている。

さて，思っている事はもう一つある。

それは支部の会則の問題である。私が支部長になってからもう10年経つ，何とかやってこれたのはすべて皆さんのお陰である。

然し10年は長いようだ。支部の運営がマンネリ化してゆく恐れがある。新進気鋭の士にそろそろバトンタッチするべきでないかと考えている。折にふれて人生，節目が大切なんだと言うが仲々肯んじて貰えない。会報創刊号にも書き，大会案内状にも同封させて頂いたが，どうしても結末は支部会則の制定に落ち着く。

会則といっても何もむづかしく考える事はない。会員の皆さんから会費を頂く関係上，会計の点，役員の任期の点，それから慶弔の点，この三点はどうしても定めておく必要があろうと考える。そこで提案だが，３～４人からなる会則制定の小委員会を設置して検討して頂いたらどうだろうかと思う。是非，賛成して頂きたい。これからは高校卒の人達によって同窓会が運営されるべきであり高卒の人達が圧倒的に多いことからも頷けられるであろう。次の機会には原案が発表される事を期待している。

本年度の大会には出席者150名を目標にして，各役員が一生懸命努力している。及ばずともそれに近い数字に何とか持ってゆきたいと願っている。又，この会報には校長さんを始めとして多くの方々から原稿を頂いている。会報の内容が益々充実し，この会報を掛橋として会員相互の親睦が益々図られることを祈念している。各方面から寄せられた御協力に深謝し，考えの一端を述べさせて頂いた。よろしくお願いしたい。

松校の近況と今年度の課題

学校長　徳　橋　時　男

公園の桜は，当初の予想に反して４月17日，18日に満開となり，大層な賑わいとなりました。校庭の八重桜は，これからになります。

各位には，松高に深い思いをお寄せいただき，感謝いたしております。

さて，３月４日には，第44回の卒業式を行い，普通科176人，被服科41人が巣立っていきました。大学（含短大）進学者22人（内４年制大学７人），専修・各種学校進学者50人，計33.2％が進学いたしました。各地に散った就職者も含め，末長くご指導を賜りますようお願い申し上げます。

４月８日には，263人が入学いたしました。地元同窓各位のご尽力により，今年度は志願倍率も上がり，それだけに優秀な生徒が入ってきました。新潟県では，今年度から定員に満たない学校・学科で二次募集が義務づけられましたが，お陰様で松高はそれをせずにすみました。このことは大きな意味を持つものであり，同窓各位の偉大さと共に私ども教職員の責務の重大さを痛感いたしております。

教職員には大異動があり，同窓の江口，関谷両先生がご退職，44年間事務室等で勤務された伊藤ヒサ氏もご退職となりました。しかし，江口先生には講師をお願いし，伊藤ヒサ氏は，同窓会の仕事のため週１回の割合で来校いただき，関谷先生は折をみて来校いただくなどご好意に感謝いたしております。新たに同窓の星，黒田両先生が赴任され，在校生の励みになることと喜こんでおります。

ところで，松高の今年度の大きな課題は，伝統ある被服科の閉科式を年度末には行わねばならないということであります。被服科は現３年生が１学級残るのみとなりました。被服科生の在学中に式典を行い，長い歴史に幕を閉じねばなりません。誠に寂しい限りであります。今後，同窓会・ＰＴＡとも協議を重ね，ご指導，ご協力を賜らなければならないと考えております。皆様からもご支援を賜りますようお願い申し上げる次第でございます。

学校では，新しい陣容のもとで平成５年度が無事スタートいたしました。生徒諸君の成長・発展を願わずにはいられません。

東京支部の方々におかれましては，一層ご壮健で，ご活躍なさいますよう，また，支部が益々隆昌に向かわれますよう祈念申し上げます。

ありがとうございました

1. 平成4年度会費納入状況（其の二） 3月31日現在（敬称は略させて頂きました）

◎男子の部

大橋俊夫，小柳実，斉藤勝三郎，清野一夫，平上憲，水尾広吉，近藤洋輝，鶴巻旒三，関谷雄二，小林末吉

（計10名　累計149名）

◎女子の部

高橋睦子，鈴木ヤヨイ，佐々木恵美

（計3名，累計65名）

合計　214名

2. 寄付金（　）内は金額、単位千円

大橋俊夫（7），水尾広吉（3），鶴巻旒三（1），小林末吉（6）

合計　延63名　214,000円

平成4年度東京支部の動き

平成4年

○ 4月18日　会報13号編集会議　於ツルマキ
○ 4月25日　幹事会，於エース高輪，出席17名
○ 5月7日　会報原稿を印刷所送付
○ 5月26日　同上校正終了，印刷所送付
○ 5月30日　幹事会，於池之端文化センター　出席20名，支部大会の件
○ 6月4日　会報13号納入
○ 6月6日　支部大会，於池之端文化センター　出席94名，来賓4名
○ 6月13日　支部大会収支決算打合せ，於中村事務局長宅，出席3名
○ 6月27日　幹事会　於エース高輪，出席14名，大会反省会及び会報発送作業
○ 8月17日　本部総会　於村松〝新滝〟支部より出席5名
○ 9月8日　記録映画〝阿賀に生きる〟試写会，出席4名
○ 9月26日　会報14号編集会議，於ツルマキ
○10月19日　支部幹事就任依頼状発送　7名
○10月24日　赤山会，於私学会館，出席23名
○11月2日　会報編集会議　於ツルマキ
○11月6日　会報原稿を印刷所送付
○11月21日　同上校正終了，印刷所送付
○12月15日　会報14号納入

平成4年度収支決算書

自平成4年4月1日
至平成5年3月31日

村松高校同窓会東京支部

収入の部		支出の部	
支部年会費	642,000	払込手数料	10,650
寄付金	214,000		
大会会費	792,000	大会経費	829,880
大会祝儀	40,000		
雑収入	8,000	会議費	257,785
		通信費	158,069
		印刷費	392,952
		事務用品費	6,723
		雑費	128,895
前期繰越金	231,537	次期繰越金	142,583
合計	1,927,537	合計	1,927,537
次期繰越	郵便貯金 90,142		
	普通預金 2,202	計	142,583
	手元現金 50,237		

上記のとおり報告いたします。

平成5年4月20日

事務局　中村　倉吉　㊞
経　理　岡本　和子　㊞

監査報告書

上記の収支決算書は監査の結果，適正であると認めます。

平成5年4月30日

監　事　芳賀　健一　㊞

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

○12月19日　幹事会　於エース高輪　出席25名　会報発送作業　望年会（忘年会にあらず）

平成5年

○ 2月6日　幹事会　於浅草ミラン　出席15名　新年会
○ 2月7日　芳賀経理部会長入院見舞
○ 2月22日　国会及び総理官邸他見学会　出席24名　部外1名
○ 3月5日　会報15号編集会議　於ツルマキ
○ 3月12日　平成4年度収支決算打合せ。於中村事務局長宅

国会見学会

会報第13号で予告してあった，国会等を見学する会は国会の佐川問題等で予定より遅くなり，本年２月22日午前11時より実施された。新潟県第２区選出の衆院議員，岩村卯一郎氏（新発田高校首都圏同窓会顧問）の紹介によるものであり秘書の白井和夫氏（安田町出身）の案内でまず衆議院内部の赤ジュータンを歩く。本会議場の説明では，“ホウ，こゝが例の牛歩や乱斗が行われる場所か”と感嘆の声が挙った。正面玄関で記念撮影のあと，議員会館地下の議員食堂で岩村代議士と昼食を共にし挨拶を頂く。食後，議員会館内の議員事務所を見せて貰ったが議員の仕事場としては案外せまいんだなの声も出た。次いで宮沢首相の留守の間にと特別の計いで総理官邸に入れて頂く。入口では警備の警官から人数のチェックを受け玄関ではバッヂを貰い胸につける。近くドイツのコール首相が来日するとかで食堂の大広間には入れて貰えなかったがガラス戸越しにのぞく。“内閣が変り新しい大臣がきまると，此処で記念写真を撮るんですよ“と，新潟県出身の守衛長さんが階段を指して説明してくれる。みんな閣僚になった気分でそこで記念撮影，間もなく宮沢さんが帰ってくるということで守衛長さんに礼もそこそこに退出する。あとは白井さんに憲政記念館を案内して貰う。憲政の神様と言われた尾崎行雄の関係資料や国会に関する資料がたくさん陳列されている。入場は無料休日無し，一見の要はあろう。しばらく休憩の後，白井氏に厚く礼を述べ解散したが，湯島の梅を観たいと一部有志で（と言っても殆んど大半だが）湯島天神へ移動。梅の香りに満足し絵馬の多いのに驚く。ついで近くの隣祥院にある春日局の墓を参観してタクシーに分乗，浅草の長屋へ。ビール，冷酒で乾いた喉を潤す。再度の希望で，浅草ミランでカラオケ。と楽しい一日であった。最後になったが岩村代議士と白井氏に厚くお礼を申しあげたい。尚，当日の出席者は，当初は31名の希望であったが風邪や都合で25名となった。（出席者の氏名は省略させて頂く）

お便りの中から　其の一

◎この度の国会見学会は，好天に恵まれ，初夏を思わせるような暖かな一日でした。
愉快なお写真も沢山頂き，ありがとうございました。
（中には我が姿に目をそむけたくなる様なものも何枚か……）
松高支部の皆様方は大変楽しい方々ばかりの集いですので，参加させて頂くたびに，ついつい長居をしてしまい大変お世話になったこと，十期生一同心よりお礼申しあげます。国会は，高校の修学旅行以来でしたので，もう30年余りにもなりますでしょうか？　当時は，まだ政治にもあまり関心がなく，漠然と見学したものでした。また，今回見学日の前日までは，小，中，高校と共に学んで来た大の親友（現在は福岡市に在住）と高校卒業以来，初めて村松町を訪問いたしました。中学時代の恩師を訪ねたり，変貌した街中を散策したり，また，学校帰りお腹がすいて，よく食べたラーメン店にも寄って思い出話に花を咲かせて参りました。ふる里は，雪こそ積ってはいませんでしたが，時折雪まじりの冷たい風が肌に痛く感じられ，その翌日の国会見学となり，もろもろのなつかしさもあって，感懐も，ひとしおと言った一日でございました。また，これからも楽しい企画を是非ともお願い致したいと存じ，心待ち致しております。（後略）（高10回　眞水道子）

◎先般は大変お世話になりました。一日暖かい天気に恵まれ，学生時代の頃を思い出し乍ら見学する事が出来，又10回生の方々とも，久方ぶりに逢う事が出来，話に花が咲き時間の過ぎる事も忘れた楽しい一日でございました。スナップ写真等沢山送って頂き思い出のアルバムを飾る一頁となりました。今後共宜しくお願いします。　（高10回　田中富子）

＊同様趣旨のお礼状たくさん頂いております。

同期会

高校第８回卒業の第２回目の同期会が11月７日（土）東日暮里の“ホテル，ラングウッド”で午後４時から開催されました。出席者は，約30年ぶりの再会ということで極めて多く，恩師の渡辺フミ先生を迎え，56名の多きにおよびました。欠席の旧友からは「越の寒梅」の差入れがあり，郷里の味をなつかしむと共に長時間にわたり楽しい話が弾み，かけがえのない仲間達を実感する事が出来ました。本当に楽しい一日でした。幹事一同，深く感謝しております。次回は，新潟在住の友から「郷里で開催」のお約束をいただいております。おたがいに健康に留意し，また元気でお会いしましょう。

（幹事代表　塚田　勝）

お便りの中から　其の二

◎〝臥龍が丘は緑なり〟平成５年新春号を頂き，いつも気にかけて頂きありがとうございます。佐伯先輩のお言葉に校長在職期間についてありましたが，小生松高８年間で４人の校長先生を東京支部に御案内しました。「宮仕えだから……」を無視して，せめて５年は頑張って頂きたいと（大きい口はきけませんが）小生も祈っております。でも，先生方も一生懸命です。いまに花開きます。右，御礼まで，

（高５回卒，酒井邦男，新津市）

◎昨年は亡父（中11回，長崎浩）の詩が掲載された松高同窓会報をご恵送いただき，眞に有難うございました。父は平成３年７月29日に亡くなりました。私も昭和15年生れの新制村松高校同窓生でございます。父は少年時代から詩を愛し生涯，詩の魔物に取りつかれていたようでした。今春４月頃，県内外の詩友や，詩の教え子達の力で故郷村松の西公園に「歳時記風土」を刻んだ詩碑が建てられるそうです。同窓会も支援して下さるように聞いております。ご帰省の折がありましたら足を運んでいただければ幸いです。先は取りあえず御礼まで。

（高11回卒，長崎高志，新津市）

◎同窓会東京支部会報をご恵送頂き，ありがとうございました。亀嶋　謙氏，吉田正平氏，武藤三郎氏など懐かしいお名前が見え〝塵の巻を遠ざけて”や“臥龍原頭幾幾星霜”の歌声が聴えてくる想いがします。私が昭和16年４月初めて上京した頃の東京支部長は式場隆三郎氏でした。ゴッホや，山下　清でも知られ本年（※平成４年）46年余の歴史を閉じた「東京タイムズ」を創刊された方でした。第１回卒業生でしたね。私は日米開戦のときも終戦のときも東京におりました。めざましく復興した戦後の東京を見ても私には当時の荒寥とした焼け野原と二重写しになって見えます。

“赤々と炎は天を焦がしたり，あゝ東京はけふも燃えるか”３月10日の東京大空襲の頃の歌です。福原平八郎氏とは卒業以来，未だ一度もお会いしていませんが長年文通によって消息を確かめ合い，同窓会の様子なども教えてもらっています。きょうだい８人のうち６人が松城で学びましたが東京支部では中村雅明，山西愈佐子がおります。どうぞよろしくお願いいたします。

会報冒頭の支部長さんの新年雑感には私も共感しております。東京支部の皆さまのご活躍に改めて敬意を表し，皆さまのご壮健とご発展を心よりお祈り申しあげます。（旧中26回　中村市雅一郎　西蒲原郡黒崎町）

映画「阿賀に生きる」

皆様の中には去年の秋，一枚のハガキに誘われて，ドキュメンタリー映画「阿賀に生きる」をごらんになった方が，大ぜいいらっしゃるのではないでしょうか。この一枚のハガキがお手もとに届けられるまでには，松高同窓会の佐伯東京支部長，広報部の鶴巻浩さん，深見洋子（私の姉）のお力添えがあったことを，この映画の劇場公開にたずさわった者として，この場を借りて皆さまにご報告したいと思います。

「阿賀に生きる」の佐藤眞監督と佐伯さんをお引き合せしたのは，去年の九月のはじめ，京橋にある試写室のロビーでした。東京の上映を間近かにひかえながら，東京在住の新潟県出身者とコンタクトをとる手がかりを摑めずあせっている監督の姿をみて，私が，日頃の不義理もかえりみず，〝監督の相談にのってやって下さいませんか〟と佐伯さんにあつかましい手紙を書き送ったことがきっかけでした。おおらかで，あたたかいお人柄の佐伯さん，東京人でありながら，三年間も阿賀野川のほとりに住み込んで，すっかり新潟なまりになってしまったくったくのない大男の青年監督とは，あっという間に打ちとけてしまったようです。佐伯さんは協力を約束し，他にも連絡をとるべき方々を紹介して下さいました。親子ほどにも年の違う監督に，気どりのない善意で接して下さった佐伯さんに，監督はあとあとまで感謝しておりました。松高出身者のみならず，新潟高校，新津高校等の方々が劇場に足を運んで下さったのも，佐伯さんのアドバイスがあってのことでした。映画は予想以上の反響を呼び，スイス，ニヨン映画祭での三賞受賞を皮切りに数々の賞を受けました。「撮る者と撮られる者との関係が，ゆっくりと時間をかけて，信頼へと昇華していったことが，この映画を美しいものにしている」と製作委員会代表の大熊孝，新大教授も書いておられます。

「阿賀に生きる」は映画の中で，映画の外で，いくつもの奇跡のような出会いを不意に実現させてきましたが，松高同窓会との出会いも，その貴重なひとつだったと思います。皆さま，ありがとうございました。

高10回卒　山下由紀子

（シネヴィヴァン六本木勤務）

囲碁と村松

本年３月２日付の週間〝碁〟なる小新聞に中田敬三氏筆による**碁林散策**という連載ものがある。**〝越後に遊べる幕末の棋客〟**として村松に関する碁の記事が載っている。これは支部会員小田怒哉氏（旧中16回）から送られて来たもので碁に興味を持つ人，碁に遊ぶ人達にとって誠に貴重な参考資料ではなかろうか。

割合と長文であるため記事の大要を抜粋して紹介してみよう。

◎前回紹介した，須坂の田中家あての本因坊秀和の礼状の中に，越後へ下ったあと「村松」へ寄ったとあった。この「村松」を見て，いささか心が高ぶった記憶がある。この手紙が発見される少し前，本因坊秀甫の越後放浪を調べていて見た別の資料に「秀和が秀甫らを連れて「村松」へ来たことがあるが時期は分からない」とあったからである。

その資料というのは明治42年３月発行の囲碁雑誌「碁界新報」に載っている〝越後に遊べる幕末の棋客と〟という記事である。この雑誌は日本棋院にもなく，国会図書館に保存されていた。それによると，まず本因坊丈和が弘化年間に「下越では海老ケ瀬の高橋，太子堂の原，早通りの玉井，満願寺の石川　大安寺の坂口，味方の笹川などいずれも地方の財産家で，後に二段あるいは初段の諸家の招待を受けて，処々の碁会に臨み，非常に繁盛だった。稽古料は一番二朱だった」という。当時村松老公（初段）が碁をお好みで秀和をお招きになった。（中略）秀和は村松を去ってから，大安寺の坂口津右衛門方に暫く逗留していた」とある。その一度というのが田中家への手紙により判明した。

秀和を招いた「村松老公」とは，どんな人物だったのか。現在の村松町に秀和訪問の跡が残っていないだろうか。村松町に照会してみた。町郷土資料館からは「秀和が来たという文献，資料はない」という返事だったが，その後，郷土史家で村松資料調査会事務所の佐藤久さんから懇切な手紙をいただいた。

佐藤さんによると，「村松老公」は村松藩の九代藩主堀直央（なおひさ）（文政二年～安政四年の三十八年間在職）と思われる。また，丈和が回った越後各地の財産家のフルネームと現市町村名を教えて下さった。丈和も訪ね，秀和も逗留した「大安寺の坂口津右衛門」は現新津市大安寺で，作家の坂口安吾の実家であることが分かった。（後略）

寄　稿

(一) 青春のひたむきな時代

高３回卒　小池　生夫

村松中学，高等学校時代というと，青春のひたむきな日々を思いおこす。

日本が戦争に負けて次の年，４月に私は旧制村松中学校の２年に転入した。父が北海道伊達紋別町の伊達中学校の教頭から村松の教頭に転任したからである。北海道の茫々とした大自然の中から箱庭のような小さなしずかな町に移って，最初に目を見張ったのは，白銀のような白米を一俵配給されて，おいしくご飯を食べたことである。北海道では，配給米がほとんど手に入らなかった。代わりに，じゃがいもやかぼちゃや牛乳を食べたり飲んだりしていた。

父が北海道から来たというので，ニックネームが「にしん」となり，その子だから「かずのこ」だと名付けられたのには面食らった。教育のレベルも高く，私ははじめて函数を石田先生から習い，米谷先生から化学の記号をならったが理解が困難であった。皆についていくのに必死だったことをおぼえている。

父がたまに休んだ先生のピンチヒッターで教室にあらわれ，英語を教えてくれた。たくさんの人をあて，答えさせるうちに，私の順番がくると，「小池」と大きな声で呼んで，狂いがなかった。それを，一つ前の席に着席していた関孝世君に感心されたことがある。母がよく「父子ともに互いの体面を保ってね」と話してくれたことを懐しく思い出す。

ある時，お前は背が高いからバスケット部に入れと誘われてから昼休みや放課後に毎日，クラブで練習をした。練習をすると，やはり上手になる。でも対校試合に出かけたりすると，２，３回戦で負けであった。当時は，新潟県で優勝すると，そのチームは全国優勝するほどのレベルであった。

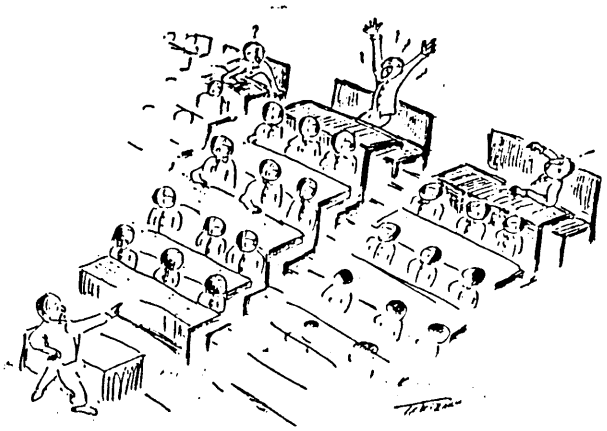
島掛先生が「人生は感激の回数が多ければ多いほど有意義なものだ」と教えてくれたが，これは味わい深いことばだと人にも紹介している。毎年，弁論大会があって，私は弁論大会の出場者に選ばれて，赤山の頂きにのぼっては空にむかって声を出し練習をしたが，本番になると津川方面の伊藤さんにいつも負けて２位だった。そういえば陸上競技では，100米12秒５，200米25秒の記録だったが，運動会で佐藤，後藤，武藤君らと走ると，どうしてもかなわなかった。何れも〝藤〟がつくのが不思議である。

村松の大火が原因で，早くなった男女共学の最初の日のことは忘れ難い。朝いつものとおり学校へ行くと，女生徒が体育館から廊下にかけて，両側の壁にもたれて並んでいる。私は，目のやり場に困って飛ぶようにしてそこを通り教室に駆けこんだ時は，心臓がおどるようであった。それから間もなく，文化祭に秋三雨雀作「国境の夜」を上演し，男女共学の実をあげた時は本当に感激した。山家先生が率いる全校合唱団にも入って，「流浪の民」など教えていただき，皆と発表した喜びも忘れがたい。日々充実した輝ける青春の日々，共に協力し，また競い合った友が，今日大勢，成功した日々を送っているのをみて，改めて，村松を誇りに思う。

(二) “思い出”階段教室の出来ごと他

高３回卒　滝沢　惣衛

☆　二時間続きの授業の為，いねむりする者が多くいた。そんなある日，仲間と長机の下にねそべってひと寝入りすることにした。（休憩時間になったら起こしてくれることを頼んで）……ぐっすり寝こんだ頃合いを見計って，代わりにいびきをかくいたずらが始まった。授業中のいびきに気付いた先生「誰だッ」一仲間がすかさず「起きれ，起きれー休憩時間だぞ」とゆすり起こす。それも授業の真っ最中，そんなこととは露知らず，本人，机の上板をもち上げー「あーアよう寝たぜ……」と大きな声。「こらッ」と先生の一喝。クラスの仲間がニヤニヤ笑っている。異様な雰囲気一「エッ？」一気がついた時は遅かった。その後，仲間はそれぞれ教務室に呼ばれ「説教」それも脚絆を堅く巻いたままの長時間正座。あれは痛かった。覚えている人もいるだろう。こんないたずらばかりしている頃。



第四神風桜花特別攻撃隊で戦死した小黒寿夫二飛曹への追想

斎藤朝之（中28）

昭和18年５月，三重航空隊において，私は予科教程の卒業を目前にして，同期の岡村逸夫君（中28）と共に小黒寿夫君たちの入居している兵舎を訪れ，入隊したばかりの彼ともう一人の同級生鈴木益郎君（中学１年時に高田中学校へ転校）に面会し，激励したことを思い出します。鈴木君と小黒君は，いつも同班で練習機と陸上攻撃機の操縦訓練も共に受けたそうです。小黒君の練習生時代の行動は，鈴木君（現千葉県光町在住）の証言によるものであり，彼の特攻出撃，戦死の模様を記してみます。

小黒寿夫君（中28）は，海軍甲種飛行予科練習生（第12期）の学科試験並びに舞鶴鎮守府所轄の栗田航空隊（京都府）での一週間にわたる操縦適性検査に合格し，昭和18年４月１日三重航空隊に入隊した。（土浦，三重，鹿児島各航空隊に分かれ，1960名入隊）

このころ激戦の続く最前線からは，一刻も早く搭乗員補充の強い要請が相つぎ，この影響を受けて小黒君たちの12期生は，飛行予科練習生教程をわずか10か月に短縮され，19年１月末に卒業した。

しかし，次の本科である飛行練習生教程へ進むことになったものの，既に国内の教育施設はいっぱいで，彼等を受入れる余裕はなかったのである。そこで危険を承知で，遠い占領地のフィリピンへ輸送船で移動し，そのの飛行場で飛練教程を受けることになった。

19年２月初旬，約300名の練習生たちは，厳寒の門司港から輸送船に乗り比島に向け出発した。輸送船は無事に航海を終え，数日後に炎熱のマニラ港に接岸した。

練習生たちは掉頭に出迎えたトラックに分乗し，マニラ市郊外にあるニコルス第二飛行場へ向かった。

いよいよこの飛行場で，九三式中間練習機の操縦訓練を受けるのである。訓練は約七か月間続けられ，８月末をもって終了した。練習生たちは，卒業と同時にあらかじめ決められた艦上戦闘機，艦上爆撃機などの小型機と陸上攻撃機などの大型機に分かれ，それぞれの航空隊へ転勤して，さらに実用機を使用しての操縦訓練を受けることになった。

小黒君は陸上攻撃機組に選ばれ，マレー半島のアエルタウエル基地へ移動し，そこで大型機の訓練を受けることになり，同期生約30名と共にマニラ港から重巡洋艦「青葉」に乗り，マレー半島中部西岸にあるバタワース港に向かった。この港の東方近くにアエルタウエル基地がある。ここは南西方面艦隊・第二十八航空戦隊に所属する第七〇五航空隊（九六式及び一式陸上攻撃機）の常駐基地であった。

操縦訓練は，まず九六式陸上攻撃機により開始された。６人で一組の編成に分けられ，操縦教官は甲飛３期生の塚田恵一飛曹長であった。九六陸攻の主操縦員席に塚田教官が腰掛け，小黒君たちは副操縦員席に腰掛けて，離着陸，上昇，降下，旋回飛行等について手とり足とり教えてもらった。

19年11月１日，甲飛12期生は飛行兵長から二等飛行兵曹に任官した。

20年２月九六陸攻，一式陸攻の操縦技術を修得し，早くも実施部隊へ配属される日がやってきた。小黒君の転勤発は，見えざる神の手によるものか運命の神雷部隊・第七二一航空隊攻撃七〇八飛行隊であった。小黒君たちは，操縦教官先導のもとに数機の一式陸攻を操縦してアエルタウエル基地を飛び立ち，海南島三亜基地を経由し鹿児島県の鹿屋基地へ向かった。

鹿屋基地においては，３月21日に初回の第一神風桜花特別攻撃隊の一式陸攻18機（指揮官野中五郎少佐）が，都井岬の南東方を飛行中の米機動部隊の攻撃に向かったところ，空母群に到達する前にグラマン戦闘機50機に銃撃され，全機が撃墜された。護衛の零戦30機も，うち10機が撃墜されこの10名を含め160名が戦死した。

４月１日に同じく第二回目の一式陸攻３機が，また４月12日には第三回目の一式陸攻８機が沖縄周辺の米機動部隊に対し，特攻攻撃をかけた。そして４月14日，第４回目は小黒君たちの特攻出撃である。小黒君は２月初旬に七二一空に転勤してきてからこの日までの２か月半は，毎日をどのような心境で過ごしたのであろうか。彼の胸中を去来したものは何であったか。

20年４月14日，第四神風桜花特別攻撃隊の一式陸攻七機は，それぞれ七機の桜花（重さ２トンの爆弾型飛行機）をつり下げて，午前11時30分指揮官澤柳彦士大尉（海兵71期）に率いられ，鹿屋基地の延長滑走路をゆっくりと離陸していった。小黒君は，第３小隊・１番機の副操縦員であった。

○第３小隊・１番機（７名，桜花１名）

機長　　梶原勝之少尉（予学13期）福岡

主操縦員　平川勇上飛曹（丙飛６期）長野

副操縦員　　小黒寿夫二飛曹

電信員など5名

一式陸攻七機のほかに，爆装零戦21機（特攻機）も同行した。これらの特攻隊を護衛する直掩制空隊は，紫電戦闘機及び零戦125機であった。ところが，紫電隊は喜界島上空で敵機と遭遭し空中戦となり，まずいことに零戦隊と誤認し紫電が零戦を攻撃したため大混乱となった。被害は1機のみで事なきを得たが，更に悪いことには零戦隊の指揮官が故障で引き返したところ，他の零戦全機がこれにならって引き返してしまった。

小黒君たちは，一式陸攻の風防窓から遠ざかっていく零戦の大編隊を，どうしたことかとぼう然としてながめていたであろう。制空隊は引き返しても，特攻隊には生還はあり得なかった。

徳之島が近づいてきた。桜花パイロットは，母機から桜花に乗りうつり，発射準備を整えた。特別攻撃隊は，ついに沖縄本島の東方海上に米機動部隊を発見した。澤柳大尉の指揮官機以下の一式陸攻全機と爆戦は，意を決して敵艦めがけ降下，一気に突っ込んでいった。特攻隊は爆戦2機が引き返したほか，全機未帰還となったので戦果は不明であるが，桜花突入を報じたもの1機，爆戦で突入を報じたもの6機であった。（桜花7名，一式陸攻48名，爆戦19名戦死）

神雷部隊の出撃は，この後も第五～第十神風桜花特別攻撃隊（20.6.22）と順次続いて計188名が戦死した。

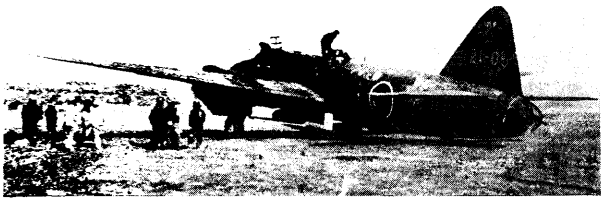
昭和20年6月8日の「新潟日報」に，特攻三神鷲として村川弘大尉（支部会報14号で紹介），小黒二飛曹，古瀬静飛兵長（五泉実業学校出身）の特攻出撃の記事が掲載された。

今，当時の新潟日報が此処にある。同級の貝瀬弘君（現松高同窓会副会長）の感想が載っている。拡大して再掲してみる。

同君の親友同町貝瀬弘君は，自分の目的に向っては徹底的に頑張るという気性で私が通学隊長をしていたとき小黒君は副隊長をして，よく働き校風の振作に努めたが，その頃上級生が下級生を殴る風が行はれ，よせと云っても行儀の悪い下級生に対しては徹底的に打ちのめしていた。こうした激しい気性で裏打ちされた特攻隊精神，さぞ壮烈な最期だったろうと思う。〟と頑張り屋だった小黒二飛曹の生徒時代を偲んでいた。

小黒寿夫君（中学5年生）
昭和18年3月ごろ

神雷部隊・七二一空の一式陸上攻撃機
（胴体下に桜花をつり下げている）



十全より白山を望む　平成5年6月　大橋貞夫（高10）撮影

松城の二旧友を偲んで

旧中22回　亀　嶋　　謙

昨年11月と本年2月に60年来の旧友が相次いで急逝した。川瀬広介君と小野里健君（旧姓，佐藤）である。2人共旧中の同級で仲良く，実に気持の良い，いゝ男達であった。何れも亡くなる半年位前に元気で会って会食した事がある。だから逝去の報には呆然自失となった。

◎　川瀬広介君のこと

昔の村松中学で過した人は，みんな知っている。町の中心である本町に「三村屋」という古くから菓子商を営む大店がある。三村屋の「三」は創業者が今の五泉市三本木か，或いは三条市の出身か何れかであった。それと村松町の「村」をとって「三村屋」と命名し，今日に及ぶと聞いたことがある。

川瀬は，そこの何代目かの長男であった。川瀬は性，単純明快で情味のある男で，卒業すれば家業を継ぐ運命が待っていたから勉強の方は二の次で気楽に商売を手伝い乍ら遊ぶ方も楽しんでいた。どちらかというと硬派で旧高校生の真似をして腰に手拭いを下げ，朴歯の大きな下駄履きにマントを背負って町の中を闊歩したり，郊外へ出て応援歌を怒鳴り乍ら歩き廻っていた。村松公園の芝生に火を付けて問題を起したこともある。そうかと思うと軟派的な遊びにも早熟の方で3年生位から早くも禁断の煙草をふかしたり，料理屋みたいな処へも秘かに出入りしていた。一つ忘れられない思い出がある。吾々がいよいよ，卒業間近の冬であった。川瀬に私，それに佐藤健，藤木昂吉，間藤吉郎（ますや文房具）の5人の悪童が当時，佐藤が下宿していた宮所通りの旅館「若松屋」に落合い，一度，置屋へ行って芸者を揚げようではないかということになった。川瀬を先頭に各々，帽子をズボンのポケットに押込み，マントを深々とかぶり，小雪の降るなかを「木村屋」という町では一流どころの料理屋に行った。場慣れの度胸のある川瀬が玄関で交渉に当った。女中さんが驚いて引込み，女将が出てきて言った。あなた方はまだ中学生の身です。立派に卒業なさって卒業証書をお貰いになったら，その時は必らず登楼させてあげます。今日のところはお引取りなさい。それがあなた方の為です。女将は言葉は丁寧だが幾分毅然とした物腰でそう言った。吾々も最初から及び腰だから体のよい断りに抗しもできず，すごすごと立去り近くのそば屋で憂さ晴らしをして分れた。今から考えると16か17の子供がよくもマアーと思うのだが，未知の性への魅力もあったし，小さな豪傑気取りの気分もあったのだろうと思う。「三村屋」の菓子のなかでは中学生には「食パン」が最も人気があった。当時の値段で10銭で7個もあった。放課後の運動が終り頃になると，注文とその場売りの食パンを入れた大きな「ひぎ」と呼ぶ箱を担いだ店員が来る。みんな，それを待っていて，貪るように三ツ四ツと喰った。こんなおいしい物は世の中に滅多にあるまいと思っていた。時には川瀬が代って持って来たりした。そういう時，彼は黙って私達のふところへ二ツ三ツ無雑作に食パンを突込んでくれた。ありがたいことであった。

川瀬は戦争中，樺太か千島方面の守備隊に居たらしい。玉砕を覚悟したことがあったという。武運が強かったのか玉砕の寸前に他の部隊と交替し北海道に駐屯，其処で終戦となったので割に早く村松へ帰還することができた。終戦後の間もない頃，私は彼に会った。村松大火の後で彼は仮家で営業していたが元気よく，気持よく私を迎えてくれた。彼のお母さんは，呉服店「紀の国屋」相田家の出で幼い頃から小町娘と呼ばれた有名な美人であったが，まだ健在であった。それからは帰省する度に五泉の小野里（佐藤）の処へ先に寄り，一緒に村松へ行って川瀬に会うのが慣わしとなった。母校へはあまり寄らないが川瀬の処へはよく寄ったものだ。

東京で旧制中学の集りがあると，よく先輩や後輩から何年頃の卒業ですか，又誰方と一緒の卒業ですかと尋ねられる。そういう時，普通は当時の最優等生の名前か，運動部で活躍した者の名前を挙げるものらしいが，私は何時も，村松になァー，三村屋という大きな菓子屋があるだろう，そこの当主の川瀬と同級だよと言ったものだ。旧制の卒業生で三村屋を知らぬ人は居ない。川瀬の名は知らなくとも三村屋は知っている。みんな　あーそうですかと納得する，私はそれが自慢であった。川瀬のお蔭である。

川瀬は一見，ズボラの気質に見えることもあるが，実は義理固く，よく気のつく男であった。それに本当は頭も良い男であった。自分で，オレは中学を出ると家業を継ぐと決めていた。勉強には熱心でなかったから所謂，優等生ではなかったが，本当にその気になれば，優等生になれる頭をもっていた。彼は運命に素直に従い，家業を継ぎ，自分の好みのまゝの人生で生涯を送ってしまった。俗事には関心が薄かった。私は立派な人生であったと思

う。それから彼は家庭に恵まれた。長男が早くから家業を継いでくれているし，最近，町の議員にもなった。子女も各々良縁に恵まれている。まあ欲を言えば，その死が少し早かったように思うが，それは今更どうすることも出来ない。諦めなければならない。享年　七十三歳であった。（平成5年2月13日）

◎　小野里　健君（旧姓　佐藤）のこと

小野里　健君との交友は昭和8年3月からで，実に60年を超える長い友情であった。その年，彼は旧制新発田中学の一年を終え，村松中学の二年級へ転校してきた。転校してきた時一番先に話しをしたのが私であったと云う。それに私も元来，新発田の生れであったこと，私の兄達は総べて新発田中の卒業であることから自然，話が合った。そして忽ち意気投合，爾来60年余の友情が続き，些かも疎遠になることがなかった。小野里は当時，北蒲原郡安田村の実家から自転車通学をしていた。私は日曜日になると，よく遊びに行ったものである。彼の実家は小高い丘を背景にして麓に建つ茅葺の大きな家で庭も又広かった。座敷の板の間や庭の遊びに飽きると裏庭から雑木林を抜け小高い山の道に入り，私達は大声をあげて学校の応援歌などを歌いながら歩き廻った。ときに大きな蛇に出合った事が何回かあった。夏になると自転車に乗って近くの阿賀野川へ行った。この大河の渦巻きの流れの中をうまく泳ぎ抜く術を船頭さんに教えて貰ったこともあった。もう満州事変が始まっていたが世の中はまだのんびりしていた良き時代であった。私は少年時代のひと時をあのような自然に囲まれたなかで過し得たことを今も貴重な宝であったと染みじみ思う。これも全く小野里のお蔭である。彼の実家は由緒ある旧家で，その祖先を遡れば遠く室町期にも及ぶと聞いた。古い「古文書（こもんじょ）」もかなりあったらしい。彼の父君は明治の末頃に今の早稲田大学の前身である東京専門学校に学ばれた。交通も不便なあの時代に東京へ遊学できる家など滅多になかってあろう。もってその家系が窺える。厳父は何時も端然と書見台に向っておられ長者の風格があった。母君は万事に控え目な方で口数は少ない方だったが大層優しい人柄であった。小野里が聡明で誠実，そして温厚篤実な気質を持っていたのは充分窺えるが，このような立派な家系からのものも預っているのだと思う。彼のこの気質は生涯失なわれることがなかった。戦後の苦しい時代に泥まみれになっていたことがあったが，この美質は益々底光りして輝いていた。小野里の性格のなかで更に見逃がし得ないのは辛抱強さ，忍耐強さがあったとは知らなかった。戦後，彼が未知の世界に入り乍ら，そして何度も倒産の際まで追いつめられながらも到頭，今の会社の基礎を固めたことは見事であったと思う。彼はまた，生来のロマンチストでもあり情緒的な歌が好きであった。彼とはよく泊ったが，湯から上ってきた時や朝の散歩の後とかに彼はよく低音で何か歌を口ずさむことがあった。私は，おやーと思って彼の顔を見つめると，彼は破顔一笑して頬を赤らめるのであった。そのあどけないばかりの素顔が美しく私はその度に彼の育ちの良さを感じたのであった。

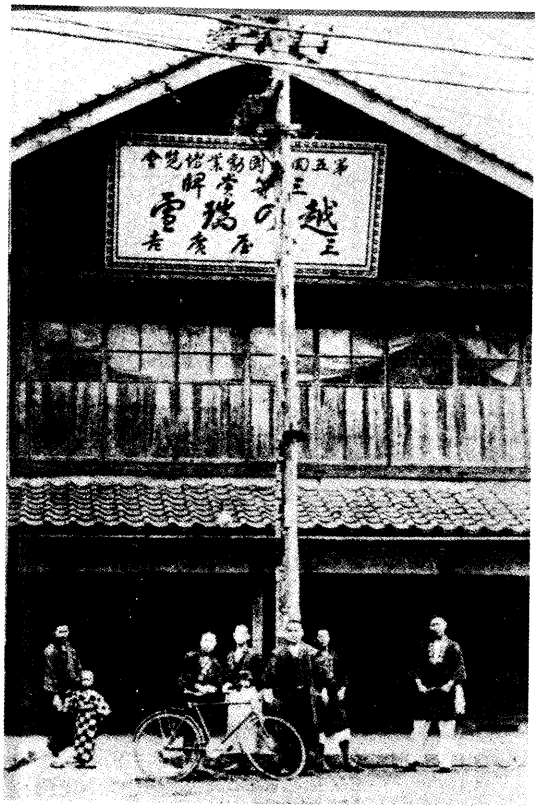
彼とは数えきれぬ程，会ったが彼と対座しているとただ雑談しているだけなのに春風駘蕩とした気分で後味がよかった。彼の人徳である。私は彼のような男を友人に持っていることを何時も自慢にしていた。私には友人がまだ居るが小野里程，深く信頼し長く友情を保っている男は他には2人か3人位しか居ない。そうなるともう宝物である。小野里は中学卒業の頃，将来，技師のような人間になりたいと言っていたことがある。秋田鉱専を受けたいと言っていたこともあった。彼は元々聡明であった。本気で受験勉強したなら相当な学校へ入れる実力はあった。私達の時代は，今のように進学塾は無かった。大体，田舎では中学を卒えた人はもうエリートであり，郡に一つしか五年制の中学はなく県下でも十校程度であった。進学塾などは都会以外存在せず中学を出て浪っていれば直ちに就職するのが普通であった。小野里は何と言っても大地主の家に生れたから，あまり進学ということに拘わらなかったと思う。それに戦後の激動がある。彼は復員してくると五泉の機業家「小野里家」へ養子に入った。その間の経緯を私は知らない。私が戦後，彼と会った時は，もうすっかり機業の仕事に没頭していた。それから今のニットー製造業に転換するのだが，苦しい時も愚痴一つ洩らさず笑顔で通していた。全くいい男だった。小野里家もさぞ喜ばれた事であろう。人間は，どんな道に進んでも運命に逆らわず素直に生きてゆく事が大切である。彼の生涯に悔いは無かったと思う，彼は又家庭にも恵まれていた。長男が立派に会社を継いだ。子女も良縁に恵まれ多くの孫にも恵まれている。享年七三歳であり，川瀬の場合と同じくせめてもう四，5年は生きていて欲しかった。思えば中学時代5人組と称して最も仲の良かった連中だった藤木長吉（茶問屋），間藤（あいだ）吉郎（ますや文具店）の両君は既に2，3年前に亡くなった。そして今，川瀬広介と小野里健の両君が逝った。

最も軀が弱かった私が残るとは神ならぬ身，知る由もない。そんな私も，もう先きゆき長い人生とは思わない。然し，私が生きている限り，彼等の思い出を胸深く蔵して偲び，冥福を祈りながら過してゆく事を誓うのである。

（平成５年２月15日）　※赤山会々長

小野里君（中央）と筆者（右）

川瀬君（右）と高岡八郎君



三村屋菓子店　幕末頃の創業で菓子商の老舗である。明治35年頃考案された〝越の瑞雪は〟同店の銘菓。村松大火後店舗も近代化されている。（大正13年頃）

（新潟日報事業社写真集より）

ちょっといい話

今日（２月６日）は幹事会の平成５年の新年会。が，のっけから浅草での会場が何故か見つけられなくて，ぐるりとふた廻りもしてしまって，やっと辿り着く。既に先輩の皆様方も，ぞろりとお揃いで見事に遅刻。「なかなか見つからなくて申し訳ありませんでした」と言うわけ。今年も年賀状を沢山頂き，支部長，編集長からは，本年も協力をとお願いされ，鶴巻さんからは，御指導をと。私の方こそ御指導を願いたいのですよ。

「今年は何も公約せず
　自然体にて無理をせず
　酒はヌル目の……量より質」と大橋さん

幹事会は当然ながら「年配者の集い」のようで，何時の間にか健康談義になっていました。〝最近ポロッと茶碗を落してしまう〟脳障害の前兆か，それには，いわしの頭，マグロの目玉，いちょうの葉っぱ，焼き肉は網焼きでと沢出さん。その沢出さん，お酒を完全に断って検査に行ったら，肝臓は異状なし，かわりにコレステロールがぐうッと上っちゃった。お酒の分を食べちゃった。食べすぎちゃったのだそうです。軀は正直に報告してくれるものですね。日課としてゴルフの朝練，あと朝食として，トーフ，揚げ，納豆，そして村松のトーフが美味しい話になり地で採れる豆がよいのです。トーフは〝豆腐〟より〝豆富〟と書くのが筋ではないでしょうか。村松の「打ち豆」はとても美味しいのです。とＹＯＫＯ。「お酒がないよ」と支部長の威勢のいい声，「ハイただいま」ホント，支部長はよく気を配っていますネ。皆さん，酒はヌル目の量より質……ですよ。

今日は芳賀さんの姿が見えない，と思ったら入院されているそうです。ですが，この会（注，支部）には規約が出来ていないので会からお見舞を出すわけにゆかない，と云う話しになり，伊藤さんの提案で，この場でお見舞カンパをし「元気な再会を祈って〝臥龍が丘は緑なり〟」としてお渡しする事になりました。文学的お見舞いだと，仙人のような風情のある芳賀さんにはぴったりと，好評でした。心良く御協力下さいました皆様，ありがとうございました。翌日，中村さんと支部長がお届けしました。

「そろそろ，歌，語（かた）るか？」の支部長のひと声でカラオケが始まりました。そして〝チクオンキ〟です。なんて古風なんでしょ。でも歌を語る　という支部長の表現が私は大好きです。歌を語るのはむづかしいものです。「新潟ブルース」で始まり勇五さんには花粉症で語ってもらえず，支部長には新曲を御披露頂き（いゝお声ですね，素敵でした。※編集部，注　これはお世辞です）そして，いつも会議に会社を使わせて頂いている鶴巻さんの「北へ」で幕となりました。今年の大会は７月３日，その日に向けて又活動が始まります。酒はヌル目の……質より量……でした。（深見洋子）

太極拳を習う

（旧中27 佐伯益一）

さそわれて太極拳を習い始めてから，もう二年近くになる。会社をやめてから運動不足になり，このまゝだとボケが早くなるぞと思い参加したが上達の方はさっぱりである。毎日曜日，２時間ばかりの練習だが，まわりの人の動きに合わせての動きだから進歩は遅い。が，今の私にとっては最適のものであり，自然のマッサージでもある。女性の方が上達の早いのは踊りの素質があるせいだろうか，始め，太極拳というと何か空手のようなものとの認識を持っていたが，案外・仲々のスローテンポである。太極拳の根本は「気功」である。古い辞書を調べてみたが「気功」の文字は載っていない。従って，先生のお話しをお借りする。「気」とは人体の機能を活発に働かせる生命のエネルギーであり，気が動けば血が流れる，「功」は辞書によれば，てがら，事業，仕事とあるが，この場合，〝働き〟あるいは〝動き〟と理解した方が適当であろう。気功には外から気を与える外気功と自分で自分の気を養ってゆく内気功があり，今，習っている八段錦気功法は，内気功である。①躰を調えること，②吸呼を調えること，③心を調えること，の三つが基本であり，長寿に効果ある健康法を錦にたとえ，八つの運動からなっている。故に八段錦気功法と呼ぶが，この三調のうち，私には〝呼〟と〝吸〟が一番むづかしいようだ。

試合も無ければ審査も無いのが気にいっている，いつかはマスターする時が来るであろう。会の〝焦（あせ）らず〟〝厭（あ）きず〟〝侮（あなど）らず〟の三原則を守り，のんびり続けてゆきたいと考えている。師は北島西居住の豊島ナツ江師範で私と同年輩，又その師は中国楊名時太極拳師家の楊名時氏であり，その動きが鶴の舞う姿に似ている処から地名をつけて〝清新鶴の会〟と名づけられている。会員のお宅近くにもこのようなグループが多くあると思う。健康保持のため，是非お勧めしたい。特に年輩の人に。

寸景

さわやかな青空がのぞいている。

学校帰りの子らが数人，輪になって楽しそうに話している。湯島小学校の生徒かな，そうか，明日から夏休みなんだ……

吾々が，この光景を見てホッとするのは，なぜだろうか。　「やはり野におけレンゲ草」

今の子ども達は，まことに忙しい日々をおくっているようだ。

吾々の少年時代を思ひだす。

放課後，友だちの家に寄ったり，手仕事をしている職人に見とれたり，大急ぎで帰って近所の悪童たちと三角ベースに興じたり，魚すくいに行ったりして夕暮まで遊んでいた。

今，この忙しい子らを誰が救えるのだろうか？

「富士には月見草がよく似合う」

女子中学生が３～４人，ハイキングにでも行くのか，デイバッグを背にキャッキャッ，いいながら，バス停へ馳けていった。　（高10）鶴巻　浩

赤山会例会

在京の旧制中学校卒業生有志で組織している赤山会の春季例会が４月17日午後１時より，市が谷の私学会館で開催された。集った人は約30名，亀嶋会長の挨拶のあと，久しぶりに出席した85才の水尾正二氏と（大正15年第11回卒）前支部長の見方謙策氏（第18回卒）から祝辞を兼ねた挨拶があり，同じく第11回卒の，川瀬五郎氏の乾杯音頭で和やかな内に会は始まった。途中，佐伯支部長から本年度支部大会に関する発言があり，特に本年は150名の参加を目標にして役員の皆さんが頑張っているとの報告があった。次の秋季例会は９月18日（土）同じ会場の私学会館で開催する旨，発表があり，全員，旧校歌を合唱した後，午後４時，めでたく解散した。

阿賀野川ラインの景勝地
きりん山温泉　**ホテル　福　泉**
磐越西線　津川駅又は鹿瀬駅下車　バス10分（東蒲原郡鹿瀬町鹿瀬）電話 02549-2-3131
いつもご利用いただきまして有難うございます。本年も又，どうぞよろしくお願い申しあげます。
佐　伯　光　俊

各部会から

◎ 去る２月22日に実施した国会及び首相官邸等の見学会は非常に好評でありました。これからもこのような会をどんどん企画して欲しいと多くのお便りが寄せられております。支部では皆様の御期待に添うべく色々と考えておりますが，御希望の向き，あるいは何か催し事がある時は知らせるようにとの御依頼のハガキ等，頂ければ幸いです。登録しておいて御通知するようにいたします。（企画部）

◎ 母校も本年３月，高校第44回目の卒業生を世に送り出しています。関東地区にも相当数の卒業生が居られる事と思います。それにしても東京支部の会員では第19回以後の卒業生が殆んど皆無の状態です。諸々の事情もあったり，又，支部の存在を知らない人も多いと思います。皆様の近辺で御存知の方が居られましたら是非勧誘していただきたく存じます。併せて支部事務局にも御連絡をお願いいたします。（総務部）

◎ このたびの支部大会の案内状に本年度の会費納入のお願いと振込用紙を同封させていただきました。御多用の処，恐縮ですが何卒早目に納入下さるよう，お願いいたします。（経理部）

◎ 支部会報の発行も第15号目となると表紙に使用する写真も殆んど使いきってしまい，苦慮しています。会員の皆様の中で適当な写真をお持ちでしたら，ぜひお貸し下さい。事務局か佐伯支部長までお送り下さい。（広報部）

編集後記

会報「臥龍が丘は緑なり」も，お蔭様で第15号を発行することが出来，多くの方から原稿をお送りいただき本当に有難うございました。

今年は季節はづれの気温に悩まされ，２月から寒暖の差が大きく体調維持に大変苦労しました。

気温不順の中で支部幹事会，広報部会の開催日にはなぜか好天に恵まれ暖かく，とくに，２月７日（土）浅草での幹事会の日は，最高気温21.9度と初夏のような陽気で夜の懇親会ではビールがうまかったので忘れられない。３月５日（金）広報部編集会議は気温16度と好天に恵まれ，さらに今年は桜が咲いてから厳しい寒さに見舞われた４月はじめも，３日（土）の編集会議は最高気温が20度まで上がり快適な環境の中での作業効率も良く編集にあたり天候までが協力してくれました。

会報作成には皆様からの，お便り，ご寄稿等が頼りです。楽しかった記憶を甦らせ，辛かったことや苦しかったことも時の経過と共に心に美しい思い出として宿っていることと思います。どんな事でも結構です400字詰原稿用紙４枚以内の原稿を事務局広報部までお送りいただければ幸です。

いつものことながら会報発行にあたり，支部長はじめ皆様方には大変お世話になり，また事務所を使用させてもらっています鶴巻様には誠に申し訳ありません，厚く御礼申し上げます。

村松高校同窓会東京支部のますますの発展と皆様のご活躍ご多幸をお祈り申し上げます。

（広報部会長　沢出赳允）

本年度初の幹事会　　５月15日

◎ 本年度の支部大会にむけ，初の幹事会が５月15日(土)午後３時より〝エース高輪〟で開かれました。出席者は29名で，大会案内状の仕分け，封入，発送作業の外当日の役割分担，進行方法等につき協議，それぞれ決定いたしました。午後５時，終了後，懇親会に移り楽しい一刻を過ごす事が出来ました。29名も出席したということは支部幹事会始まって以来のことであり，大会に対する意気込みぶりを窺い知ることが出来ました。今後も，如くありたいものです。午後６時，散会後の有志による二次会は例によって例の如しでありました。

新幹事

◎ 高校第10回生の山下由紀子さんが幹事会に於て満場一致，幹事に選出され御本人の承諾を得ました。よろしくお願いいたします。

笠原弁護士

◎ 検事生活14年，弁護士勤務２年の笠原静夫氏（昭41年高第18回卒）。東京支部幹事，(故笠原昇先生の甥にあたる）が，このたび独立して法律事務所を開設されました。同窓の相談所として御利用下さい。

事務所　〒102 千代田区麹町１－３
山京ビル麹町別館204号室
電　話　03-3238-6531

※ お祝いとして幹事一同より，会報第10号の表紙にもなった〝霊峰白山〟の写真を全紙大に拡大して（額入）贈呈いたしました。

平成５年７月　　第15号
発行人：新潟県立村松高等学校同窓会東京支部
広　報　部
事務局　〒108　東京都港区高輪２－１－24　㈱寿内
TEL　03-3445-6501
郵便振替　東京　2-136445

校　歌

旧県立村松中学校校歌

1. 塵の巷を遠ざけて
雲たち迷う白山の
麓に立てる松の群
見よ凌宵の気を含む

2. 緑色濃き木陰には
夏も尽せぬ泉あり
湧きて流れて未遂に
汪洋として海に入る

3. 落葉をくぐる流れにも
岩石砕く力あり
清きは水の姿にて
強さは誰が心ぞや

4. 万緑の気地に潜み
風雪野山に荒るる時
色さえ変えぬ常磐木の
強きは誰が操ぞや

5. それ英雄も人傑も
人の子吾等がたぐいなり
嗚呼松城の健男児
勇みて立つべし諸共に

旧村松高等女学校校歌

1. 愛宕の山のむら松の
常緑色の常磐なる
操を胸に日の本の
をみなの徳を磨かばや

2. 心は身はも真夏なほ
日に輝ける白山の
雲にもまさる清さもや
正しき道を進まばや

3. 其の名も高きこの里の
桜の花のうらうらと
のぼる朝日に匂うごと
気高き姿保たばや

新　校　歌

相馬御風　作詞
中山晋平　作曲

1. 普く照らす天つ日の
光を浴びて年々に
伸びてしやまぬ若松の
ときわの志操いや堅き
学徒われらの在るところ
明朗の和気みなぎれり

2. 見よ質実に清純に
進取の生気漲き溢れ
文明の花の咲くところ
希望は常に輝ける
道に我ら　進ましむ
努めなんいざもろともに

応　援　歌

1. 緑濃き臥龍ケ丘に
轟くは我等が歓呼
若人の高なる血潮
たたえつつ春の日めぐる

2. いざ叫べ若人の誇り
わななける力の腕
見よや君歓喜の胸に
輝くは永久の勝利

1. 臥龍原頭巻星霜
切磋琢磨の功を経て
からくれないの香に匂う
誉れは高き松城の
健児が胸に血やおどる

2. 我等がえらぶますらおの
誉れは海の湧くがごと
望みは雲のゆくがごと
月の桂をなゆずりそ
栄えある名をぞこしえに

1. 松城健児六百が
祖国の為に剛健の
大図をここに定めんと
送ついぞせし我が勇士
覇権をゆずることなかれ
我等六百ここにあり

2. 臥龍原頭精気あり
義憤に満ちし大丈夫が
驕奢の潮せきとめて
逸惰の眠り打ち破り
高うつ胸の雄叫びに
進めとなるを如何にせん

3. 今壮快の晴れ戦
見よ雄叫びの只中に
我等が望み一筋に
冒にぞかかる勇戦士
覇権をゆずることなかれ
我等六百ここにあり

ふるさと

（文部省唱歌）

作詞　高野辰之
作曲　岡野貞一

一、うさぎ追いし　かの山
小ぶなつりし　かの川
夢はいまも　めぐりて
忘れがたき　ふるさと

二、いかにいます　父母は
つつがなしや　友がき
雨に風に　つけても
思いいずる　ふるさと

三、こころざしを　はたして
いつの日にか　帰らん
山はあおき　ふるさと
水は清き　ふるさと